

# 埋文よこはま7



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成15年2月28日発行

## 中世の寺院

### 一史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査より一

史跡称名寺境内で行われた発掘調査で建物の屋根に使われた瓦の破片が発見されました。軒先に一列に置かれる軒平瓦で、端に瓦当がつけてられています。瓦当のところに「福」と「寺」の字がみえます。この瓦は鎌倉の永福寺で使われている瓦と同じものです。この永福寺は源頼朝が奥州平定の際に平泉の壮大な寺院群に目をみはり、毛越寺を手本として文治5年(1189)につくられた寺です。中の島をもつ池、二階堂・阿弥陀堂・三重塔などを配した伽藍配置をしています。称名寺はこの鎌倉の永福寺を直接のモデルとしてつくられたといえます。この瓦の発見はそうした説を支持するものといえます。

#### 国史跡称名寺境内のあらまし

横浜市金沢区の史跡称名寺境内は、経済的、政治的に重要な役割を果たした中世鎌倉の外港の六浦を防御する好位置に立地した金沢北条氏の菩提寺です。その特徴として、最盛期における伽藍配置が明確に理解可能な詳しい重要文化財の絵図、国宝になっている歴代当主の実時、顕時、貞顕、貞将の肖像画、歴代当主および歴代住職の墓塔群、県立金沢文庫に膨大な中世文書、などの明確な史料に裏付



遺跡の場所

けられている史跡です。

これまでに、大正11年に中心部を国史跡指定、昭和47年の国史跡追加指定を含めて約16haが国史跡の範囲となっており、横浜市が7haあまりの境内地の買収を行いました。史跡全体の管理団体の立場で、昭和53年度から昭和62年度にわたって苑池の整備を実施しています。その後、苑池部分を除く旧伽藍全体の状況を把握するため、

3か年にわたる確認調査計画を策定し、平成12年と平成13年に発掘調査、平成14年に整理・報告を国庫補助により行いました。

#### 発掘の目的と方法

史跡称名寺境内の旧伽藍跡を追究するといっても創建当時なのか、顕時の時なのか、どの時点に求めるかは問題です。幸い国の重要文化財「称名寺絵図並結界記」があります。この絵図は結界記によれば元亨3年(1323)2月24日に営まれた結界作法のために描かれたといえます。結界は戒律を守るため一定の浄域を設けた区域をい

います。この絵図には池・金堂・講堂・方丈・両界堂・護摩堂・僧房・三重塔・別院称名寺・新宮・別当房・僧庫・浴室・無常院・庫院・雲堂・経蔵などの建物、顕時や貞顕の墓などが描かれています。それとともに、森蘊氏が結界図によって称名寺境内旧伽藍復原図をつくっています。これらを参考にすることにしました。

調査は、今までの方針にしたがっ



講堂基壇の検出状況



称名寺伽藍復元図（森蘊氏の図を参考に作図）

て、金堂と仁王門を中軸とした基線、並びにそれに直交した基線をもとに10mグリッドを境内にかけ、このグリッドラインに沿うようにトレンチを設けました。

これらのトレンチは先にのべた「称名寺絵図」に描かれている建物がありそうなところに配置しました。

#### 平成12年度の発掘調査

「称名寺絵図」に描かれている講堂・方丈・両界堂・浄地・僧坊並びに僧坊裏の建物群が存在したかどうか、およびそれらの位置・規模などを確認する調査を実施しました。

この年度の調査の目玉の講堂は、「絵図」によると、正面七間の建物で、他の建物址が礎石のみを用いたものなのに対して、講堂は亀腹状の基壇があります。発掘は講堂の部分に十文字にトレンチを設定して、まず基壇端部および上面の状況を確認することにしました。この結果、東西25m、南北19m、高さ約40cmの規模を有すること、礎石などが遺存しないこと、基壇周囲に幅0.7～1.9mの浅い溝状の窪みがめぐり、一部に砂質凝灰岩製の礎石が見られることなどが確認されました。ついで、講堂基壇の築成状況を断面



両界堂の玉石敷き検出状況



三重塔北側調査区内の柱穴群

で観察するために、一部を基盤層まで掘削しました。この結果、基壇周辺で確認された地業面より70～80cm下に基底面があり、基壇周辺の地業面のレベルで土層の堆積状況が異なることが明らかにされました。地業面より上位が比較的大きなシルト岩ブロックを乱雑に積み上げられ、隙間に灰褐色土やシルト岩ブロックが充填されているのに対して、下位ではシルト岩ブロックと黒褐色土を互層とする版築が施されていました。

方丈とみられる部分では砂質凝灰岩製とシルト岩製の礎石とみられるものが発見されています。他のトレンチの観



阿弥陀堂南東部の地業層

察から砂質凝灰岩製のものが方丈に伴うものと思われます。

両界堂は講堂の西側後方に位置する建物です。調査の結果柱間が2.10mで3つの砂質凝灰岩製の礎石と、礎石が抜き取られたような痕跡が1か所、さらにその西側では粉碎したシルト岩ブロックが遺存した部分、および玉石敷きの部分で礎石が抜き取られた痕跡が2か所あります。また、最も東側に位置する礎石から直交し南側にも礎石が抜き取られたような痕跡が2か所見出されています。これらの遺



無常院推定地の石列遺構

構はいくつかの時期にわたって築かれたものとみられます。

講堂の北東にある浄地の調査では明確な建物址が認められませんでした。ただ多量の炭化物が発見されています。

僧房と僧房裏建物址群が推定される場所の発掘では礎石状のものいくつかと少なくとも6面の地業面が見出されています。調査範囲が広いために遺構相互の関係をすることは困難でした。

以上の他に「称名寺絵図」に記載されていない、やぐらと水路状遺構がありました。両界堂を推定したところの南を発掘した時に水路状の遺構が発見されました。これは幅

70cm、深さ20cmのものです。両界堂側では砂質凝灰岩の切石を用いているのに対して、講堂側では意識的にシルト岩の切石を縁石に用いています。また、両界堂側の縁石の西端と東半分はすでに石が抜き取られています。これらの底面には平瓦・丸瓦の他に、コケラ状の薄い木製品が敷き詰められているような状態で見出されました。冒頭の瓦はここから発見されたものです。

#### 平成13年度の発掘調査

この年度は、「称名寺絵図」に描かれている称名寺（阿弥陀堂）・三重塔・雲堂・庫院・経蔵・行堂・無常院・東司・浴室・僧庫があるかどうか、およびそれらの規模・位置などを確認することを目的としています。

発掘の結果つぎのようなことが分かりました。

称名寺境内の全面にわたって大規模な地業が施されていました。そのうち、特に大規模なものについては金沢貞顕が苑池を造営する以前に行なわれた可能性が高いとみられます。そうした地業層の下にも数枚の地業面がありました。最下層にあたる地業層については北条実時が持仏堂を建てた時期にも比定できると考えられます。

阿字ヶ池の西側の地業面の上面は江戸時代にはすでに削平されており、阿弥陀堂に比定される遺構は確認することができませんでした。

三重塔のところでは、表土層のすぐ下がシルト岩盤層に

なっていて、方形のピット群が発見されました。礎石と思われる遺構も検出されました。

「絵図」に描かれている北条貞顕・金沢貞顕の墓所にいたる階段は検出することができませんでした。

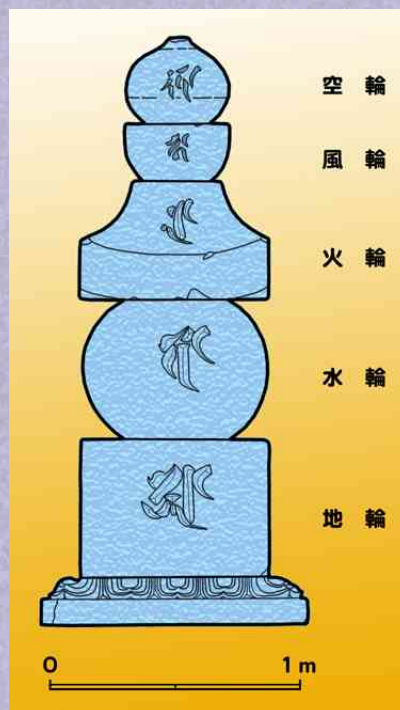
阿字ヶ池東側に展開している経蔵・雲堂・庫院・行堂などの建物群にあてはまる遺構は検出することができませんでした。また、伽藍完成時以降に何回かの地業がなされて遺構が存在していることも分かりました。

#### どっちが顕時のお墓なの？

『称名寺絵図』には清浄な区域を朱線で示し、この朱線の外に五輪塔・宝篋印塔・板塔婆等が描かれています。その中に西側の山裾に板葺きの棟門を構えた連子欄間の塀で南と東を区切った墓域があります。そこには五輪塔3基と宝形造宝珠付の小堂が描かれています。その上の方に右よりに「貞顕宗顕」、左よりに「顕時恵日」と墨書きがあり、金沢北条氏の当主貞顕、顕時のお墓と見られます。

実際三重塔の西に金沢貞顕公廟と金沢顕時公廟があります。東側の五輪塔が金沢貞顕のもの、そして西側が金沢顕時のものです。しかし、金沢貞顕が元弘3年(1333)に没したのに元亨3年(1323)にかかれた『称名寺絵図』に墓塔があること、金沢貞顕の墓とされている石塔の下から蔵骨器の青磁壺が発見されて元弘3年に鎌倉の東勝寺で火災の中で自刃した貞顕の遺骨を集めて収めることは難しいとみられることから、東側が金沢顕時のものと考えられます。

五輪塔は下部から方形、円形、三角形、半月形、団形を積み重ねた塔をいいます。この五つの形は密教の標幟で、方形は地、円形は水、三角形は火、半月形は風、団形は空をあらわしています。この五輪塔は密教で説く宇宙の生成要素である五大をかたどっています。各輪の4方に1字ずつ梵字を刻すことが多く、それによって胎蔵界四仏をあらわしたものとされています。





**遺跡への行き方**

東京急行電鉄東横線の菊名駅の改札口を出て右手に行き、階段を降ります。川崎鶴見臨港バスの停留所があります。鶴見駅西口行に乗り、バス停の殿山で降ります。道路を渡り、バスの進行方向にすすみ、某クリニックの脇すぐ右に入る道があります。これを道なりに下っていくと上寺尾小学校の正門前に出ます。さらに道を進むと右手に殿山公園があります。このなかを西奥にさらにすすんで階段を上っていくと台地の上にあります。左手に教育委員会の説明板があります。

**寺尾城址の発掘**

横浜市は緑あふれる環境づくりに関連して殿山公園の樹木の植栽を伴う整備事業を行うことになりました。そこで、平成5年12月に殿山公園の西端を発掘しました。調査面積は約170平方メートルです。調査区域の南端には東西方向



殿山公園への入口

に東へ下る溝状の落ち込みがあり、「空堀」と考えられるものです。発掘の結果、この空堀は断面が逆台形をした形で、壁面の傾きが50



寺尾城址の説明板

度から70度をはかります。堀は幅が5m前後、深さが約3mです。また、空堀のなかの上部には宝永火山灰層が堆積していました。こ

のことはこの堀がつくられたのが18世紀初頭以前であることを示しています。

**寺尾城について**

寺尾城は主脈の台地から西側の池谷、東側の馬場谷と呼ばれる支谷によって開析され、南に舌状に張り出した台地上に占地しています。この台地の基部に東西に延びる空堀があったといえます。台地の基部を掘り切って城を築いたのです。城の南にあるキガクボという小さな谷をはさんで西側は横浜市立東高等学校付近までが城域となります。城に関連する土塁の一部がキガクボ西奥のマンションのなかに保存されています。城の東側は観音山の先端までです。この観音山の直下で北宋銭を中心に二千枚近くの古銭を伴う瀬戸瓶子が発見され、15世紀前半から中葉以後に埋められたと考えられます。寺尾城の城主は『北条氏所領役帳』(永禄2年、1559)にある「諏訪三河守」でしょうか。城は



発掘当時の空堀

永享年間(1430~1440)につくられ、永禄12年(1569)の武田信玄の小田原攻めの時に落城したとみられています。

**埋蔵文化財センターのご案内**

出土品や整理作業のようすを見学できます(予約が必要です)。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス  
<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

\*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

**埋文よこはま 7**

発行日 2003年2月28日  
 編集・発行 財団法人横浜市ふるさと歴史財団  
 埋蔵文化財センター  
 〒224-0034 横浜市都筑区勝田町 760  
 TEL 045-593-2406  
 FAX 045-593-2403